図書ニュース

第２号
2008.6.13 発行
大阪府立北野高等学校図書館

今回の図書ニュースの特集は、この時期恒例の「教育実習生による図書紹介」です！みなさんがお世話になった実習生の方々は、北野高校で一体どんな本に出会っていたのでしょうか？是非、図書館に探しに来てください。

《教育実習生による図書紹介》

１.高校時代に読んで印象に残った本
２.後輩に是非とも読むことを薦めたい本 **について、紹介して頂きました。**

☆　Ｋ・Ｍさん（地歴科）☆

１．東野　圭吾『秘密』文藝春秋　913-H50-3
家族愛、夫婦愛、親子愛を描いた先の展開が予想できない作品。のめり込むようにして読むこと間違いなし。さあ手に取ろう！あなたも東野ワールドに魅せられる。

２．松井　秀喜『不動心』新潮社
普段、図書館で本を借りて読む派の森本が、思わず手にして購入した作品。まさに森本の人生にとってのバイブル。敢えて内容には触れません。

☆　Ｓ・Ｈさん（物理科）☆

２．(1)市川　拓司『そのときは彼によろしく』小学館
『**いま、会いにゆきます**913-I44-1』の著者、市川拓司の作品です。僕的にはこっちの方が好きです。どんな内容かというと、とても美しくて、尊い、ある「夢」にまつわる物語です。読み終わったら必ず感動の余韻に浸れます。オススメです！

(2)島田紳助・松本人志『哲学』幻冬社
二人の笑いの天才が書いた本です。題名だけ見ると堅苦しそうな感じがしますが、二人の話し言葉で書かれているので、スラスラと読めます。内容も笑いのことだけでなく、人生の様々な場面についても語ってくれていて、二人の考えがわかります。結構ハッとすることも書いているので、もしかしたらこれからの生き方の参考になるかもしれません。

☆　Ｄ・Ｗさん（物理科）☆

１．安部　工房『壁』新潮社
僕の一番好きな作家の一人による短編集です。彼の作品は一度は読んだ方がいい。この独特の感覚・印象を受けた作家は他にはいません。不条理なその短編の数々はまるで自分の心の底を見透かされたようなものばかりでした。同じ著者の「水中都市・デンドロカカリヤ」「幽霊はここにいる」などもオススメです。

編者より　図書館には『**安部公房全作品**918-A5-1-1~15』があります。

２．三島　由起夫『金閣寺』新潮社　913-M13-8

「三島由紀夫」という名前から手を出しにくかったり、いわゆる「文学」っぽい印象を受けるタイトルから読むのをためらったりするかもしれない。しかし、まあ騙されたと思って読んでみて下さい。今までずっとこれが「名作」と言われ、多くの人に読まれ続けていることが分かるから。百聞は一「読」に如かず。やっぱり「ミシマ」はすごいです。

☆Ｙ・Ｔさん（化学科）☆

２．藤嶋　昭『アサガオはいつ、花を開くのか？』神奈川新聞社

日本化学会の会長である著者が大学に講演しに来られたとき頂いた本です。アサガオは、漢字で「朝顔」と書きますが、夜明けを待って咲く花ではありません。日が暮れてから一定の時間が経ってから花が咲きます。これはアサガオ内にある「生物時計」によるものと考えられています。このような身近な化学について、２ページずつ、106話で書かれています。これを読めば、科学好きの人はもっと科学が好きになり、科学が嫌いな人は、これからは科学に興味をもつことができるでしょう。

☆Ｇ・Ｙさん（化学科）☆

１．池波　正太郎『真田太平記　全１２巻』新潮社

この作品は1582年から1622年までの約４０年間にわたり、真田家という信州の大名を中心に据えて書かれた時代小説だ。僕の個人的な感想だがこの作品の魅力は、「人はいつかは死ぬ」という単純明快な真理をベースとして、人間の「生と死」をある意味では生々しく、真正面から描いているところにあると思っている。つまり、「死」があるからこそ「生」が輝くということなのだが、当時受験の重圧で気分の晴れることが少なかった僕にとって、作品中の登場人物たちが、常に死と向き合いながらも必死に生きているその様がとても眩しく見え、またそこから多くの元気を貰ったのを覚えている。また、登場人物の言動には著者の人生観が投影されており、読んでいて大変興味深い。

長編小説のため登場する人名や地名が膨大なので、戦国時代に慣れ親しんでいる人でなければ読み進めるのはやや大変だろうと思われる。なお、北野の図書館には『真田太平記』は無いが、『**人斬り半次郎**913-N43-1-31』という作品が置かれているので、これで池波正太郎の作風に触れてみるのもいいかもしれない。

２．レイチェル・カーソン『沈黙の春』新潮社　519-C3-1

この本は 1962 年のアメリカで出版された。自然を人間が完全に支配すべく化学農薬や殺虫剤が無制限に使用されていた当時の社会に対し、それらの危険性や自然を支配するという考え方の愚かさを認知させることに成功した初めての本であると言って良い。

「いまは専門分化の時代だ。みんな自分の狭い専門の枠ばかりに首をつっこんで、全体がどうなるのか気がつかない。」この本からの引用であるが、特に理系分野に進もうとしている人はこういう傾向にありがちだと思う。是非ともこの本を手にとってみてほしい。

☆Ｍ・Ｎさん（生物科）☆

１．リチャード・バック『かもめのジョナサン』新潮社　933-B15-1

高校時代、唯一北野の図書館で借りた本です（笑）。中学時代の国語の問題文として出題されていたもので、続きが気になって借りました。ごっつー速く飛ぶことに命をかけた、ジョナサン（かもめ）のお話です！

２．Bruce　Alberts

『細胞の分子生物学（Molecular Biology Of The Cell）』ニュートンプレス

医学部、農学部、理学部、工学部、薬学部等を目指し、生物（特に生化学）をやる方は、是非大学に入学してから卒業までに一回は読破して下さい！めっちゃ力がつきます！でも、ごっつー高くて、ごっつー分厚いです・・・。

編者より　同じ著者の本が図書館にありますので、是非ご参考に！

→Bruce　Alberts他著『Essential細胞生物学』南江堂　463-E1-1

☆Ｎ・Ｙさん（生物科）☆

１．(1)手塚治虫『ブラックジャック』秋田書店　726-T1-8-1~17

主人公のブラック・ジャックが本当に格好いい！人と人との関わり合い、命の大切さなど色んな内容が含まれていて、漫画といえども非常に濃い本の１つです。

(2)スペンサー・ジョンソン『チーズはどこへ消えた？』扶桑社

ページ数も少なく、読みやすい本で特に１、２年生に読んでもらいたいです。将来うまく生きるコツ、この本でがっつり学んで下さい。

２．(1)伊坂　幸太郎『重力ピエロ』新潮社

この本を読んで、伊坂幸太郎が好きになって、彼の作品をほとんど全て読んだのですが、この本が一番好きです！映画化もされて、僕の好きな俳優、加瀬亮が主役を演じるらしいので、とても期待しています！

(2)森見　登美彦『夜は短し歩けよ乙女』角川書店　913-M82-1

いくつかの賞を受賞した森見登美彦渾身の一冊！キャラクター設定や書き口が独特で非常に味わい深いです。青春を感じたい人は是非！！

☆Ｔ・Ｍさん（英語科）☆

１．五木　寛之『人生の目的』『大河の一滴』幻冬社

これらは、高校時代悩んでいた自分に、母が薦めてくれた本です。北野にいると、辛くなる時もありますね。頑張らないといけない、でも、頑張れない自分がいる・・・そんな自分がもどかしい、許せない。でも、人間だからそういう時期もあります。ありのままの自分を受け入れて下さい。行き詰まった時、是非読んでみて下さい。

２．(1)池上　嘉彦

『〈英文法〉を考える－〈文法〉と〈コミュニケーション〉の間－』筑摩書房835-I7-2

英語で他者とコミュニケーションを取るには、学校文法からコミュニケーションへの溝を埋める必要が出てきます。日本語と英語は単純な一対一対応などしていません。文法的に正しい文章でも、伝えたい「意味」を正確に表現出来なければ、無意味であるどころか、誤解を招くこともあります。「認知言語学」の考えが高校生にも分かる文章で書かれていて、大変示唆的な本であると思います。

(2)山田　雄一郎『英語教育はなぜ間違うのか』ちくま新書

英語が「外国語」である日本（English as a foreign language＝EFL）では、よっぽどのmotivationが無い限り、週三回程度の授業では、高校卒業まで英語を勉強しても、喋れるようにはなりません。著者は日本の「理念なき英語教育」の問題点について鋭い考察を行っています。自分がなぜ「英語」を勉強するのか、その教育体制はどうなっているのかについてこの本を通して考えてみてください。また、英語Ｒの授業で紹介した著者のお勧めの英語Reading勉強法が載っているので、是非参考にして下さい。

編者より　同じ著者の本が図書館にありますので、是非ご参考に！

→山田　雄一郎著『日本の英語教育』岩波書店　830-Y6-1

(3)山野　忠彦『木の声がきこえるー樹医の診療日記』講談社

１年生で私が担当した英語Ｒの授業で扱った、ムツゴロウ超越的存在、山野忠彦さんの本です。山野さんの人となりが良く分かるらしく、また授業で出てきた1976年などの年に何があったかなどの記述もあるかもしれません。

☆Ｙ・Ｈ（家庭科）☆

２．(1)重松　清『はじめての文学　重松清』文藝春秋　913-H52-1-9

特に「カレーライス」がおすすめです。小学６年生の教科書で読んだのですが、とても素敵なお話です。大切なことを思い出させてくれる心温まるお話です。

(2)山崎　拓巳『人生のプロジェクト』サンクチュアリ出版

この本の序章（導入）を是非読んでみて欲しい。先ばかりを見つめ、生き急ぐ現代人。ふと立ち止まることで何かみえてくるかもしれない。

(3)東野　圭吾『どちらかが彼女を殺した』講談社

おもしろい！とにかくおもしろい！！本や活字が嫌いなら是非これから挑戦してほしいです。そして、北野のみんななら、本の最後の「手引き」を読まなくても推理できちゃうかも！？と思うとわくわくします。東野圭吾さんは読みやすいし、おもしろいので、イチオシです♪

☆Ｙ・Ｉさん（音楽科）☆

１．イマーヌエル・カント『純粋理性批判 上・下』岩波書店081-I1-4　81-1b 81-3b

全てはここから始まりました。いったいここはどこなのか？感じるとは何なのか？この一瞬に何が起こっているのか？細かく系統的に精緻に思考・整理されています。カントにより観念論は大きく展開することになりました。この後には実践理性批判、そして判断力批判へと、深淵から表層へと向かいます。

２．(1)高山　守『ヘーゲル哲学と無の理論』東京大学出版会

私の師事している師の著書です。私はいつも、師との散歩や食事、その一瞬間から哲学を知り、また求めています。ここでは、ヘーゲル哲学の真の姿を出そうとする試みが、大変情熱的に展開されています。マルクスの流れは一端に過ぎず。

(2)アレックス・カーショウ

『血とシャンパンーロバート・キャパ　その生涯と時代』角川書店

私は、ヘミングウェイからキャパを知りました。写真とは何か。ここでのそれは、ごく一端かもしれませんが、視覚の大きな魅力に近づきました。“音楽する”ということには、キャパのような、このような意志を必要とします。

(3)佐々木　幹郎『水中火災』国文社

黒いどろどろした若さ、その中には“ぬくい血”を感じます。「表紙の楽譜は、詩人の音楽への憧景」何度か授業後お茶をご一緒させていただきました。音楽への悩みを聞いてくださいました。優しい詩人です。活版印刷の凹凸、紙の質感、感官への刺激。縦書きの日本語には、重力によるリズムがある。